

P・ドラッカー 企業経営学の指導原理は損失の回避である」

参考著書 逆境を生き抜く名経営者、先哲の箴言 北尾吉孝 朝日新書

企業経営学の指導原理は利益の最大化ではない。損失の回避である。

したがって企業は、事業に伴うリスクに備えるために、プレミアムを生み出さなければならない。

PF ドラッカー氏は日本では非常に熱心なファン (私もそうだが・・・)がおり、ドラッカー学会という私設の研究会もあり、著書も多数あり、有益な話を書いてある。

しかし、アメリカの経営学コースで主流というわけではない。

アメリカの経営学修士 (MBA) の講義で教えられるポイントを一言で言えば、こうらことだ。

「企業経済学の指導原理は利益の極大化である」

そのために、大変な数のケース(事例)から研究し、ノウハウを積み上げる。

それは財務諸表の読み方から事業における効率性の追求といった、どちらかと言えば経営に関するテクニカルな手法で、経営者がどうあるべきかといった人間よりのものではない。

ドラッカーの立場はそうした MBA コースの教えとは異なる。

先の言葉は、その端的なもので、企業経営の指導原理は損失の回避である、としている。

これが意味する企業経営は、利益極大化を目的とするそれとは 180度違うと言ってもいい。

とにかく利益を出すという立場で経営する経営者と、損失を出さないという立場の経営者では、経営手法はまったく異なるものになる。

私自身、それまで企業経営の指導原理は「利益の極大化」だと思っていた。営利法人の存在趣旨としては当然のものだと思えるし、そうでなくては、企業は回っていかないと思えた。

だが、ドラッカーは「損失の回避」であると言う

これはその言葉だけではわかりにくい、この言葉を補うと、理解しやすくなる。

つまり企業は潰れずに存続することが第一だ」と

これは頭に入れておかないといけないと思った。

MBA の職業的経営者や、投資銀行、株主、ファンドマネジャーたちは、利益の極大化こそ企業経済学の指導原理だとしてビジネスを行ってきた。

彼らは実績を上げるために、徹底的に「短期間で利益を極大化する」方法をとる。

損失を回避し、企業を存続させるために、利益がいる。

ドラッカーは、利益の極大化を第一とはせず、あくまで企業を存続させることを第一とした。

それには、事業に伴うリスクに備えることが必要になる。

そしてそのためにこそプレミアム(余剰分)を生み出さなければならないと言っているのだ。

冒頭の言葉には、次のような言葉が続く。

リスクに対するプレミアムの源泉は一つしかない。利益である。

<コメント>

損失を回避し、事業を存続させるためにはリスクに備えないといけない。利益を極大化させることが目的ではなく、事業存続のリスクに備えるためにこそ利益を生み出さないとはいけないという考え方は、企業経営を考えるうえで非常に深い示唆を与えてくれる。

いかに目的が大切か、あらためて考えさせられる。